

Title	華北華中旅行日誌
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.20, No.2 (1941. 11) ,p.134(320)- 141(327)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19411100-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(燕京大學歷史學會「史學年報」第三期史學界消息整理による)
一九四〇十二月刊

(杉本 忠)

華北華中旅行日誌 (自二月十一日 至三月五日)

此文は在北京の杉本忠君より送られた私信の一部であり、「史學」に掲載するものではないとくれぐれも注意書のあつたものであるが、参考となる節が多いので印刷することにした。文責は編輯者にある。

二月十一日 午前十時三五分北京站發。午後一時五六分天津站着。塾員鈴木功・佐藤欣一兩氏の案内で鐘紡第六廠を訪ひ、足立廠長以下塾員櫛山慶吉郎・林喜八郎氏等に面會。夜は天津三田會の歡迎晚餐會に出席。會長鄭梅雄氏は偶然にも筆者擔任學級學生の嚴父なること判明。尙翌日見學の打合をなし、鐘紡の來客や出張者用の宿泊所に御世話になる。設備よく下手なホテルより勝ること萬々である。

十二日 午前中より鐘紡鈴木氏、昨夜の三田會で知りあつた東邦洋行月村博光氏の案内にて、先づ天津特別市公署教育局に局長何慶元氏を訪ねる。同氏はやはり塾員で、當地の圖書館を視察したいと云ふ我々一行の爲に、教育局第三科長陳葆光氏をわざと案内として同行せしめられた。元來天津の圖書館はさして注目する程のものでもないが、昭和十四年八月東大和田教授一行が北支蒙疆・中支の主要都市に就て、今次事變による圖書の移動集散の狀況並に管理保存の狀態を視察された際にも、折からの洪水の爲

調査を省略され、濟南と共に調査報告（一）雄・市古宙三共著「支那に於る文獻の現存狀態」東亞論叢第二輯所にも漏れてゐるので、此の機會に一見したいと志したのである。陳氏は先づ吾々を天津市立第一圖書館に導かれ、館長姚金紳氏が親しく一行を案内せられたが、普通の邸宅を利用してゐる同館は、平家建の爲床上約四尺程水に浸り、未だにその痕を壁に止めてゐる有様で、現在閱覽を中止し整理中であつた。水害を被つたまゝ未だ修理を經ない漢籍は、一室に堆く積上げられてゐるが試に手に取ると各頁は糊で固めたかのやう、宛ら一枚の板の如く貼付いて、その修理の容易でないことを想像せしめた。火の氣のない書庫の寒氣は骨を刺すばかり、毛皮裏の中國服を纏つた姚館長はともかく、應接室で外套を脱いだまゝの吾々洋服連は頓え上つてしまひ、更めて氣候と服裝の適應性などを頭に浮べるのであつた。それより姚氏の部屋で藏書類その他に就て質問したが、吾々の前に持出された統計は古いもので、しかも一見してその不備が明かであつたので可及的速に新に調査して報告されることを約された。本報告の遅延した理由の一半はこの報告を待つたことにあるのである。それによると本圖書館の歴史は比較的新しく民國十七年天津特別市の設立に當り、市當局は圖書館建設の必要を感じ、十八年九月現館長姚氏を籌備處長に任命。十九年冬南開楊花園大街の住宅を購つて館舎となし、二十年六月二十日開館、市立圖書館と稱したが、二十七年四月市立第一圖書館と改名した由で、藏書總數は毀棄圖書を除き六七、〇〇一冊、でその内中國文書籍六〇、五四六冊、日語書籍五九九冊、洋書一、七九一冊、兒童書三、二三四冊、善本六五〇冊地方文獻一八一冊、他に雜誌三〇種。今次事

變の影響は比較的輕少で圖書損失二百餘種、器具損失一百餘件、他に館舎が數ヶ月間社會局に借用せられた程度であつたが、二十八年の洪水時に於ては浸水七十餘日に亙り、圖書の損失一萬四千餘冊、器具建物の破損亦夥しいものがあるとの事である。尙從來河北省立第一圖書館として知られたものは現在市の管理に移り、天津特別市立第二圖書館と改稱されたが半ばは軍に於て使用してゐると云ふことであり、且此地の圖書館が本來さして貴重な圖書を藏しないことは第一圖書館の調査によつても明かとなつたので、それより直ちに佛蘭西國天津私立工商學院に附屬する有名な

リサン北疆博物院を見學した。此處では院長のルネ・シアルヴェエ師が案内せられたがリサン師が親しくオルドスのシエラオッソングルや陝西の水洞溝などで發見した舊石器を見て東洋史の時間に耳に口に親しいものだけに感慨深いものがあつた。おなじみの周口店土北京支那人類の頭蓋骨も最も目を惹き易い處に大事さうに陳列してあつたが、最近發掘當事者の一人斐文中氏に會つた折きくと天津のは模造だと云ふことだつた。實物はやはり協和醫學校にある由で、尙燕京大學内に歴史學系前古物陳列館が昨年十二月四日正式成立その網羅された古物標本の大部分は斐氏が永年周口店に在て發掘したものの由であるから今秋一度參觀したいと念じてゐる。同夜午後十一時四〇分天津站發濟南京に向ふ。

十三日 新黄河出現以來の無くなつた黄河の鐵橋を渡つて間もなく午前九時二二分濟南着。直ちに總領事館に館員丸山喬氏を訪ね、同氏より有野總領事に紹介せらる。午後山東省教育廳專員豊田神尙氏を訪問、山東省立圖書館に就て聞く。本圖書館は地方圖

書館としては有數のものであつたが、今次事變の爲全くその藏書を失つた由で、失望を禁じ得なかつたが、その所藏の金石類は一見の價値ありとのこと、同氏の紹介状を持參大明湖畔の阿館を訪ふ。同館は雅趣ある支那式庭園を有し、金石保存所・漢畫堂等は全く異狀なく、後者には山東滕縣の漢代畫象石が數多く陳列せられてゐたが舊海源閣藏書を始め今は亡く、海源閣の文字ある建物にも、今は唯治安恢復後蒐集せる二萬三千部ばかりの書を藏するのみで、一覽したが取立て、記するに足る本を見なかつたのは寂しい限りであつた。

十四日 城内の趵突泉・廣智院等を見物。午後四時二〇分濟南驛發津浦線を南下。曲阜の孔子廟に赴く爲兗州に向ふ。此の邊り鐵路の兩側に處々監視の小屋あるは他處と同様であるが、その小屋の入口に必ず朱色の房を付けた所謂紅槍を一本立てかけてあるのが注意をひいた。紅槍會が我軍に協力を誓つたと云ふやうな話は新聞やニュース映畫で見た事があるので、それを如實に示すものとして極めて興味深く感じたが、歸來後の調査によると、華北の農民の武裝は必しも紅槍會員でなくとも紅槍を使用するのが普通である由で、地區によつては之を以て直に紅槍會員とも斷じ得ないわけであるが、頗る異色ある情景として永く筆者の印象に残つたのであつた。夕闇の内に暮殘る泰山が車窓に現れたが、日本の山と違ひ裾野をひかず、いきなり聳えたつてゐて思つたより高くないやうに感ぜられる。泰安では眞冬だと云ふのに泰山詣での華人團體が澤山下車した。何となく富士講とか御嶽詣と共通の感じである。兗州に着いたのは夜もかなり更けてからであつた。濟南

のツーリストビュローで聞いてきた宿は先年の洪水で廢業してゐる由。漸くたどりついた唯一の邦人宿は水災前までは帝國領事館であつた由である。

十五日 曲阜行のバスは午前八時半に出るので早朝起床。八時半と云つても之は日本式鐵道標準時間であるから、實際の支那時間七時半であり、夜の長い冬の朝はなか／＼明けず、起床した時は未だ眞暗であつた。寒氣厳しく相當古いバスはなか／＼スタート出来ない。日華乗客全部下車して車臺を押してやつと出發する。泗水を渡り滿目唯黄色く凍つた大地の中をバスは疾驅する。四十分ばかりで曲阜縣城が見えた。さして大きくもないが、型通り城壁に圍れた姿はやはり儼しく典型的な地方都市で、大成殿の臺が宮殿のやうに遠望される。城外でバスを降り、細い道を通つて城門をくゞれば、路は更に狭く辛じて洋車を通す程度であるが落付いた静な街並はさすがに連綿たる孔里を思はせ、未だ貼つて間のない新春の門聯の字句からも、近頃のおざなりでなく一軒一軒趣向を凝したかの如き床しさを感ずることが出来た。孔子廟はやはり北京を初め他の何れの都市のものより規模大きく、自ら襟を正さしむる森嚴な空氣に満ちてゐた。それより顔子廟に詣で、更に城外の孔子林に向ふ。城門を出れば日やうやく高く、風稍々出るも平和そのものゝ田園風景である。參道には老柏並び一の門を入れば洙水橋あり、橋を渡り石獸石人の間を経て二の門に至る。鶴・鵲・啄木鳥など嬉々として遊ぶも聖地にふさはしい。それより左折すれば多くの落葉樹を戴いた高塚の前に大成至聖文宣王墓と刻せる一大碑が立つてゐる。即ち孔子の墓である。左手には三

年の喪を終り弟子たちの散じた後も子貢唯一人廬を營んで、更に三年間師の墓を守つたと云ふ有名な傳への廬の址がある。午後二時半のバスは遅れてなか／＼來ない。城外には少しく緑萌え初め摘草する姑娘の姿も散見する。兗州でもさうであつたが、此の邊一帶鳥の多いこと驚くばかりである。夕刻兗州の宿に歸り、午後十一時四七分發列車で一路南京に向ふ。

十六日 午後四時一〇分浦口着。北京では冬中一度も見られなかつた雨が降つてゐる。やはり中支である。揚子江を渡り南京に入る。浦口站・下關碼頭・南京挹江門と三つも關所があり、華北と違ひ日本人と云ふだけでは通用しないのはいさゝか勝手違ひであり、少しく不愉快でさへもあつた。

十七日 午前中總領事館に吉竹領事を訪問。中支建設資料整備事務所南京圖書部へ紹介して頂く。同所では福崎峰太郎氏に面會。所員の案内にて書庫を一覽。その書籍の豊富なるに一驚した。別棟に所蔵されてゐる華文雜誌・公報・新聞類のコレクションは既に有名であるが、その目録も中支建設資料整備委員會の手により既に昨年六月上梓せられてをり、その一冊を惠贈せられたので早速一覽した處、かねて一見を希求してゐた颯風雜誌の所蔵を知り、借覽するを得て夕刻まで是を筆寫したが、北京と違ひ石炭の恐しく高價な此處の閱覽室にはスチームもストーブもなく、なか／＼能率が上らなかつた。

十八日 午前中より又々例の寒い部屋で前日の續きを筆寫し、三時頃やつと完了する。それより同所の紹介で鷓鴣寺下の中支建設資料整備事務所標本部を訪聞。所員の案内にて先づ南遷古物中

の美術品の一部陳列せられたるものを參觀する。さすがに北京故宮の古物の精粹を擇んで遷したもののだけに、現在北京武英殿その他に陳列せられ居るものよりも一層美事なものであつた。後に上海同文書院大學の小竹教授に聞いた話では陳列せられ居るものはほんの一部に過ぎず、大部分は猶軍の倉庫に保管せられてゐると云ふことで、今春汪政權側に引渡されてからも、此の狀況は依然その儘で變化のないらしい事は、最近南京を見て來られた後藤博士の言によつても察せられた。次いで別棟に考古學標本を參觀。寫眞圖版などおなじみの殷墟その他の出土品の實物に接することの出來た事は欣びに堪へなかつた。夜は太平路から夫子廟にかけて書肆を漁つたが、既に邦人に漁り盡された感あり、有る本は何處の書店も大體同じで、北京に比し種類遙に少く、價錢又高價であるので此の方面の收穫はなかつた。

十九日 午前中清涼山清涼寺を訪ね、漢西門より城外に出で、莫愁湖に向ふ。城壁と秦淮河に挟まれた石を鋪いた隘路の兩側には、難民の蔭小屋が夥しく並んでゐるが、その茅屋の門口にも赤い色の切紙細工が眞新しい舊正の喜を傳へて活氣横溢してゐる。戎克群集ふ秦淮河の水西門外の橋を渡れば間もなく莫愁湖である。勝棋樓に登れば水も空も城壁も唯灰色である。鷺や鴨の群も此の晩冬の眠れる湖水の閑寂を攪すことは出來ないらしい。午後は遊覽バスに乗つて戦跡史跡を一巡する。先づ英靈奉安所を拜し夫子廟を経て、光華門に出で今次事變激戦の跡を偲び、中山門より明孝陵を訪ひ、中山陵園内の美しい鋪装道路を一路坦々と中山陵に至る。南京の城内は北京に比し頗る殺風景で何等見るべき物

もないが、此の邊城外一帯はなかく清々しい風情を持つてゐる。折柄の細雨に紫金山は全く雲に包まれ、中山陵又その上半を霧の中に没してゐたが、その壯麗なる規模は流石に新中國の精神的中心をなす靈場なることを思はせた。それよりバスは國民革命記念塔軍官學校を経て鷓鴣寺に至る。現在の建物は明代のものといはれるが、その形觀は自ら北支の寺觀と異つてゐるのも興味深く眺められた。寺背の豁蒙樓上より見渡した玄武湖は筆者の想像より遙に廣く、島中に菜園あり寺塔ある眺めはなかく棄て難い。

二十日 午前中より洋車を驅つて明初の功臣の墓を訪ねる。朱僕の金陵古蹟圖考をたよりに太平門より城外に出る。玄武湖を左に見北行三支里ばかり道左に中山王徐達の墓がある。門を入れば林中に神道碑高く聳え、石馬石羊石虎武將文臣各二を列ね、更に進めば墳丘あり。全體に保存極めてよく此種の墳墓として典型のものである。それより太平門外に引返し城壁に沿て東行すれば小さな谷を隔て、開平王常遇春の墓がある。もとはあつた筈の碑石も今はなく、石馬己に倒れ、邱墓亦考ふるべからず。僅に石羊翁仲の衰草の間に錯落し、荒寂の感に勝へずと云ふ朱僕の表現さながらの情景である。共に明太祖の股肱として中原恢復の元勳として徐達と並稱される名將でありながら、その墓の荒廢はあまりにも激しい相違である。それより再び明孝陵を訪ひ、中山門より城内に入り明の故宮の遺址を探る。北京故宮のプランを見てゐる筆者には朱僕の指摘する東安門・午門・内五龍橋・外五龍橋等何れも直にそれと頷くことが出來た。今はこのあたり一帯菜園となり、他にも基壇・倒柱・瓦石の存するもの少くない。一體南京

の荒廢は今大事變よりも主として太平天國の亂によるものであると云はれてゐるが、北京よりも廣い城壁の内には至る處空地や畑があり舊南京政府の都市計畫になる道路だけが白々しく鋪裝され、その兩側に骨ばかりのコンクリートの建築だの震災後の東京を思はず假小屋などが並んでをる風景は、北京を見た目にはあまりにも貧相である。勿論北京の美しさもよくつきつめて見れば故宮・宮苑・天壇その他各處に散在する舊宮室關係の建造物と人口の三倍に上ると云ふ夥しい老樹の美しさに過ぎないかも知れないが、此處にはその故宮も老木もないのである。城内外を埋める夥しい皇軍部隊と日華兩國の官衙を除いたら實際後には何が残るであらうか、連日雨に惱まされた故か遺憾ながら南京はあまり好い印象を筆者に與へなかつた。唯軍票一本建の爲物價が思つたより安く感じられたのがせめてもの取柄であつた。

二十一日 午前八時の急行にて南京站發。同九時一二分早くも鎮江著。直に甘露寺に向ふ。寺は北固山上にあり、唐代の創建に係ると云ふ。境内陵雲亭の廊壁に天下第一江山の文字を見るが、下流に孤島焦山を眺め、彼岸に瓜州・六圩を望む揚子江の景觀は誠にその文字に背かないものがある。歸途憲兵隊に立寄り金山寺參觀許可證を貰ひ金山寺に至る。鎮江の市街は思つたより廣く、活氣横溢せるさまは寧ろ南市に勝る程である。金山寺は城西の街外れ金山と呼ぶ丘上にあり、往時は揚子江中の孤島であつたものが、河道の變轉により陸地と接續したと云ふ。その爲周圍はクリークと揚柳に圍まれ、寺前には戎克の泊するあり、山上に聳ゆる寺塔との調和は頗る美しい。寺は規模宏壯、所藏の宋板大藏は貴

重なものである。午後十二時十五分鎮江發。二時五〇分蘇州着。先づ城外の名勝を巡覽。寒山寺はその寺容の極めて貧弱なることその名の著はれたるに反せることは既に定評あり、楓橋を見て西園に遊ぶ。戒幢寺の大雄寶殿は規模宏壯である。有名な虎邱を訪れた時は陽既に斜めであつた。古塔は夕日に一しほ色映え、劍池・千人石・眞娘之墓など此處は傳説の寶庫である。歸路支那式庭園の一典型である留園を一覽する。

二十二日 今日は蘇州城内の名勝を探る。吳の孫權が建立したと云はれてゐる報恩講寺(北寺)の塔は明の萬曆十年に起工されたと云ふが九層からなり、頂上に登れば眺望頗る雄大である。寺の東南小許にある獅子林は城内に於る著名な庭園である。此地の道教大本山たる玄妙觀を經、双塔寺塔、滄浪亭を見て、孔子廟に至る。戟門の碑石に刻まれた南宋淳祐天文圖、陸理圖(支那全圖)は頗る著名なもので、その石摺を筆者も購入した。更に開元寺無梁殿瑞光寺塔を見て、急行天馬號に乘車。午後四時一〇分上海站着。驛に着くと擴聲器が邦人の一人歩きを戒め、特に制服軍人の注意を促してゐるのはさすがに上海なるかなと思はせた。上海は幼時六年間居住の地とて、第二の故郷の如く懐しさに堪えず、夜バンドより南京路に散策を試る。併し徒に米國に做つた摩天樓の林立に昔の倂更になく、そこには建築物に何等の調和も統一もなく、谷底のやうな馬路を二階の大型バスが疾驅して、横斷するにも全く命懸けである。寧ろ天津の租界の方が遙に落付いた美しさを持つてゐる。

二十三日 日曜日の爲連絡つかず、單身戰跡見學に出發。陸軍

隊本部裏の天通庵站より吳淞行ガソリンカーに乗る。往昔小學校の遠足で遊んだ事のある江灣競馬場の時計塔には砲彈の跡が未だ生々しい。吳淞クリークを渡り、終點の砲臺灣で下車。細雨を降る中を寶山縣城に向ふ。今次事變に花々しい戦傷死を遂げた同期の塾員故神谷肇一等兵最期の場所を何とかして弔ひたいとは、その時から四年越の念願であつたが、今圖らずもその願が叶はふとしてゐるのである。風さえ加はつて傘を持たぬ筆者に迫る寒氣は酷しかつたが、此の行だけは自動車や黄包車さへもふさはしくない。冷雨の中を歩行するのがやはり一番自分にとつての悦びであつた。寶山縣城の城門には中國人の巡警がゐるのみであつたが彼等の態度は實に丁寧で好意に満ちてゐた。さして廣くもない城内に案内してくれたが、自分の求める野戦病院は既になく、その近くに日華合同の萬靈塔と寶山神社が空しくありし日を語るのみであつた。宿へ歸ると間もなく鐘紡第一廠の塾員高鹽準人氏が來訪、平涼路の同廠内俱樂部に案内せらる。

二十四日 前記高鹽氏の案内で同文書院大學を訪ひ、小竹文夫教授より種々話を聞く。次で徐家滙の佛蘭西天主堂附屬の土山灣印書局にて書籍を購入、歸途兆豐花園に遊び、河南路・福州路の書肆街、南京路の洋書店を渉る。

二十五日 午前中より江灣明治路の維新學院に同院幹事仲少佐を訪問、氏は舊義塾配屬將校で昨夏來燕の際は本塾北京公館に宿泊せられた事もある舊知の仲である。同院の保管されてゐる上海方面に於る接收圖書を一覽、晝食を共にし、上海南京方面に關し示唆多き話を聞く、それより河南路の商務印書館その他にて書籍

を購入、その中の中國地方誌綜録は北京では品切、各書店で店の參考資料にするので賣品が殆どなく、偶々商務印書館に一部残つてゐたのは幸運であつた。しかし軍票高の際とて北京に比し何れも頗る安價に購入出來た事は今次旅行の一收穫であつた。

二十六日 正午日本人俱樂部に於て上海三田會の幹部と會食。鐘紡第一廠長山田久一氏、新任の三菱銀行支店長小山内信氏、日本人俱樂部の中澤七五三人氏、海軍武官府の吉田寛氏、慶應義塾中支研究所の管理に當つて居られる宋雲望・蘆澤駿之助氏等である。話題は例の醫大並に病院建設に關するものが多かつたが、話の中に蘆澤氏とは上海日本小學校現北都小同窓にして、幼時互に家庭に往來せる仲なること判明。一しきり懷舊談に花が咲いたが、杭州行の豫定の爲他日を期して別れ、午後三時二〇分發。車中同乗の一下士官より沿線警備の苦心談を聞きつゝ午後八時二〇分杭州着。

二十七日 宿は孤山を見下す西湖北岸の丘上にあり、食堂よりの眺望は絶佳である。庭には紅梅・白梅・椿などが咲き誇り、野棲の栗鼠が嬉々として樹間を跳廻つてゐるのも、荒涼とした北支の冬に慣れた眼には夢のやうである。午前中領事館を訪問。孤山の中支建設資料整備事務所杭州標本部の菊池三芳氏に紹介せらる。それより同氏の案内にて、もと四庫全書を収めた文瀾閣を參觀、現在は考古學標本を陳列しあり、次いで同氏と共に西隣の圖書部に至る。此處は舊浙江省立圖書館孤山分館であり、此地の接收圖書を収めてゐるが、重慶側に搬出せられて今はない四庫の櫃のみは一室に保存せられてゐる。午後は遊艇を西湖に浮べ、湖中

の阮公墩・湖心亭・三潭印月等の名勝を見る。鴨・鶩の類多く阮公墩には鶴が遊んでゐた。晩は來訪せる菊池氏と談話。同氏は早大社會學科出身、今春同所が中國側に返還された由を知り、其後如何されたかと氣に掛つてゐたが、最近杭州を訪れた後藤博士の談により、同氏が従前通り同所に勤務され、博士も亦同氏の歡待を受けし事を知り欣快に堪えなかつた。

二十八日 午前中孤山を散策。中山公園・平湖秋月・放鶴亭等を見る。午後は菊池氏と同道、白樂天の遺營になると云ふ白堤を通り杭州市街に入り、同回の鳳凰寺を見る。これは前日菊池氏と文瀾閣内で寫眞を發見、兩人とも大に興味を唆られたのであつたが、今では寫眞にある立派な門もなく、中は塵が堆く荒廢を極めてゐる。此の舊都の音に聞く宋元時の繁榮の址を偲びたいと計畫してゐたが、城外のみならず城内も一部はあまり安心しては歩けないと云ふ話で、湖畔周遊に止め、雷峰塔跡・南屏山麓の淨慈寺を訪ひ、蘇東坡の築きしと云ふ蘇堤を通り、岳王廟中の岳飛の墓に詣で、再び孤山に歸り西冷印社を一覽す。晩は菊池氏と杭州市街を散策す。本屋に獨出物のない事は蘇州と同様である。

三月一日 午前中はあはたゞしい旅の疲れを休め、午後の列車で上海に歸る。驛には往昔の上海小學校の同窓出迎へ、直に歡迎會場に導かる。工部局員あり、爲替業者あり、紡績會社員あり、銀行員あり、何れも永年在住の士としてその話は頗る含蓄に富むであつた。何時の間にか留守中荷物は蘆澤氏邸に運ばれてゐる由で、同邸に御世話になる。母堂とは絶えて久しい對面である。

二日 蘆澤氏の案内で慶應大學中支研究所を訪問。それより龍

華寺に詣づ。此の邊一帶往昔は桃花の名所として春は散策の士極めて多き地であつたが、その後の急速なる上海の膨脹により何時しかその痕跡も止めぬ有様であり、寺塔のみ昔を語るも、本堂の屋根は砲彈に大破されて以前の俤もない。歸途南京路では英米共同で日本に警告と大見出の敵性新聞を盛に呼賣してゐた。かゝる環境の故かデパートの賣子等も吾々に對して極めて不愛想で、支那商人特有の愛嬌ある態度も此の邊では見られない。かうした敵性租界も利用方法によつては援日ルートともなる爲急激な現狀變更が差控えられてゐるわけで、今回の米政府の米人引上げなども、極東米人の安全性を疑ふと云ふよりも援日ルート縮少の意味を多分に含めたものではなからうかと云ふのが昨夜の老上海連の話題であつた事も想起された。今にして思へば資金凍結により更に通商斷交により租界がその援日ルートとしての一面の機能を全く終息する時、又租界の特殊性の命脈も絶たれる日ではなからうか。晩は舊友の案内でメトロポールホテル・パークホテル・キヤセイホテルを巡る。キヤセイではリットン卿が泊つたと云ふ日本式裝飾の部屋を見せて貰つた。

三日 午前九時奉天丸にて青島に向ふ。黃浦江沿岸の戦跡を眺むれば感無量である。浦東側には夥しいオイルタンクが目につく。當時既に萬一上海にガソリンが入らなくなつたら、あの夥しい人口を擁して、その主要部分をバスに依存してゐる上海市内外の交通は如何なるかと云ふことが問題になつてゐた。石炭の不足と高價の爲電力に不足をして工場の操短をしてゐる位であるから、無軌道電車の路線を増加するわけにもゆくまいし、石炭木炭の代用

車を用ふるにも燃料難は依然として付き纏ふわけである。昔のやうに黄包車を主體とするには上海の人口はあまりに多くあまりに遠距離にまで發展してゐるのであるまいか。揚子江より山東への航路は往昔元が海路江南の米を大都方面に輸送せる航路を偲ばせる。此の日幸ひ海路平安である。

四日 晝食後暫くして青島の街が見えだした。話には聞いてゐたが、想像以上に美しいのに一驚する。水あくまで青く、街全體が獨逸式赤瓦に統一されてゐるので、遠く眺めれば宛ら童話の挿繪の如く、それが支那かと疑ふばかりである。鐘紡第五廠の藝員畑長治・秋宗二三代兩氏の出迎を受け、美しい海岸沿の道をドライブする。海濱公園・舊砲臺・ゴルフ場・青島神社を一巡する。舊獨逸總督官邸であり最近汪精衛主席の宿舍となつた迎賓館を見て、やはり藝員の鐘紡第五廠長増田幸雄氏に晚餐を御馳走になる。同氏は支那史に深い興味を持たれてゐるので話がはづみ、九時四〇分の汽車に今少しで乗遅れる處であつた。發車後幾何もなく本日は狀況が悪いので燈火管制して走るとの告示を受け、電燈全部消して眞の闇で走つたが、幸ひ何事もなく二三時間で再び點火された。

五日 永い單調な旅行を終日續ける。杭州附近では沿線に菜の花が咲き、上海でも蒲公英が咲いてゐた程であつたが、青島では風が冷く、河北の畑には未だ一物の緑も芽ばえてゐない。出發時と全く同様のから／＼に乾いた大地があるばかりである。その上北京間近くなつて雪さえ降つてくると云ふ有様、今更ながら華北と華中の氣候の相違に驚き、その變化をもたらす土地の廣大さを

感ぜずにはゐられなかつた。此の相違は決して氣候ばかりではない。人心も治安もやはり相當な相違を示してゐる。平和な北京のみゐたのでは、その支那觀も温室的に箱庭式に歪められてしまふ恐れが多分にある。その意味からも出来るだけ各地を親しく旅行することの必要が改めて痛切に感じられるのであつた。

(杉本 忠)